

## 第3部 町家の再生へ向けた提案

～ 旧市街に住む 雁木のまちの再生計画 ～

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻  
建築史研究室



## 序章 調査の経過と概要



## 序章 調査の経過と概要

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査担当

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻  
建築史研究室

#### (2) 調査参加者

藤井恵介（東京大学大学院工学系研究科助教授）、  
角田真弓（同技術官）、松本裕介（同大学院博士課程）、  
山野敬史、吉田想子、高橋利郎、加藤悠希、  
鈴木智大（以上同大学院修士課程）

#### (3) スタジオ設計課題参加者

高橋利郎、加藤悠希、鈴木智大、月岡幹雄、  
村田朋子、矢野俊和、山口義敬、吉澤春奈  
（以上修士課程1年）  
曾根秀晶、長谷川実希（以上大学4年）

#### (4) 調査期間

平成15年5月23日～25日 町家実測調査  
〃 9月16日～18日 工務店、左官業の  
聞き取り調査

#### (5) 報告書作成

##### 【執筆分担】

序章 藤井恵介

第1章 藤井恵介、角田真弓、高橋利郎、加藤悠希、鈴木智大

第2章 山野敬史、吉田想子

##### 【図面作成】

角田真弓、松本裕介、山野敬史、吉田想子、高橋利郎、加藤悠希、鈴木智大、月岡幹雄、矢野俊和、山口義敬、吉澤春奈、曾根秀晶

##### 【編集】

藤井恵介、角田真弓

### 2. 調査の趣旨と視角

2001年度の上越の調査を実施して、その後一年の間

において、再び上越市から調査を依頼された。前回の調査では、町の持つ文化財的な資源の可能性を広く求め、その一部を明らかにすることが出来た。本年度は単年の調査であり、現在の上越市にもっとも必要と思われる一つを選択し、問題点が明確になるような調査、研究が求められた。

2001年度の調査の時から上越市の都市計画部局と相談していた大きな課題は、町家の空家が増加しつつあること、空家が徐々に取り壊されていくことへの対策を探ることであった。空家に取り壊される時には、同時に雁木も取り壊される。そうすると連続した雁木が歯抜けになってしまい、結果的に雁木全体の連続性が危うくなり、さらに雁木の取り壊しが進むのである。

この悪循環に対処するためには、町家の居住、使用を促進することがどうしても必要である。町家の調査を進めるなかで理解したのは、現在の町家の居住環境が必ずしも良好ではないということである。特に設備は本格的な改修が行われていないためにかなり不便であるし、暖房も効きが悪い、チャノマが薄暗い、というようないくつかの目立つ問題点がある。上手な修理・改造を行えば、現代の新築住宅に普及しているような設備は容易に取り入れることができるし、また、少し手を加えれば、町家の内部は光の溢れる快適な空間へと変化することもありえる。

一昨年度の調査時にも検討されたのだが、その修理・改造の具体例を作ることは、町家の取り壊しを止めるための最も緊急の課題であると思われた。しかし、その実現を住民に期待することは、なかなか困難な状況であると言わざるを得ない。そこで、市当局が積極的な施策を実行に移す必要があるように思われた。市が主体となるならば、町家を公務員住宅、市営住宅に転用するといった方策が考えられる。

負の遺産としか考えられていない町家を、そうではない、と言うためには、是非ともその良好な実例を作る必要があるわけである。もしそれを見て市民が高く評価すれば、次々と広がっていくのではないか。そのような連鎖の発端をつくりたいというのが狙いである。（藤井恵介）



## 第1章 町家の改修案・都市の改造案



# 第1章 町家の改修案・都市の改造案

## 1. 東京大学設計スタジオ課題の概要

### (1) 実施の経過

東京大学工学部の建築学科、建築学専攻では、4年生の学部生と修士課程の大学院生を対象とする設計製図に、各教官がスタジオを持ち、数人のグループを個別に指導する、という仕組みを持っている。以上のような状況のなかで、このスタジオ設計の課題に、この上越市の町家の修理・改造案を検討することを取り上げられないか、と考えた。このスタジオ課題に学生達が少しでも関心を持ち、いくつかの修理・改造案が提出されるとしたならば、それは上越市にとって新しい第一歩となるであろう、と。町家を理解した上で新しい案を提出するのであるから、町家の調査は重要な基礎的作業となる。したがって、スタジオ参加者全員に町家の実測調査に参加することを義務付けたのは当然のことである。(実測調査結果は第2章参照)

### (2) 町家の実測調査

まず、5月23日～25日に高田地区の町家実測調査を実施した。通常の民家調査の要領に従い、研究室スタッフ5名(藤井恵介・角田真弓・松本裕介・山野敬史・吉田想子)とスタジオ参加者7名が参加した。調査は、大島電機倉庫(本町6丁目)、山田表装店(本町2丁目)、F家住宅・旧I家住宅(大町5丁目)、を対象として、実測調査と聞き取りを行った。



図1-1 実測調査の様子①

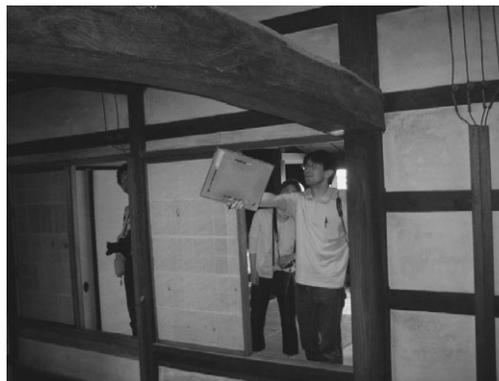


図1-2 実測調査の様子②



図1-3 実測調査の様子③



図1-4 実測調査の様子④ (聞き取り調査)



図1-5 実測調査の様子⑤  
(市民研究員を交えたミーティング)

学生・大学院生達の高田の町、町家に対する印象はさまざまであった。そもそも大都市出身の学生が多いので、町家を見たことがあったとしても中に入った経験はほとんどない。入ったことがあった場合でも、見学用に整備されているものであったりする。今回のように、実際に家族が住んでいる、すなわち生きている町家を隅々まで拝見し、図面を取り、家族の方にお話を伺うという経験は実に貴重でしかも驚きに満ちたものであった。

上越市在住の方々でも、市民研究員に伺っても実測調査の経験はほとんどない。すなわち町家を隅々まで観察したことがないということである。住宅は、自分の家以外ほとんど知ることが出来ないのが多くの実状である。

### (3) 設計作業

さて、このような経験を基礎にして、学生達が基本的なアイデアを出し始めたのが5月の末頃である。それをもとに一月ほど相談、検討を繰り返し、最終提出日7月1日には参加者全員が課題を提出した。

町家を修理・改造して何とか現代的な生活に対応できるようにする、という出題者側の当初の目論見は見事に外れることになった。というのは、学生達の想像力は、町家という一棟の家から外へと向かい、数棟をまとめて考える、あるいは空き地に新しい家を造る、さらには高田を福祉都市とする構想まで、アイデアは実に多岐に及んだのである。

対象とした建築、修理・改造、新築を図に示すと次の通りである。考えられるすべての組み合わせが登場した。

	修理・改造	新築
単独建築	① 鈴木智大 ② 山口義敬 ③ 加藤悠希 ④ 高橋利郎	⑤ 吉澤春奈
複数建築	⑥ 矢野俊和 ⑦ 月岡幹雄 ⑧ 曾根秀晶 ⑨ 村田朋子	⑩長谷川実希

(数字は、次節以降での掲載順)

各設計案の具体的な内容については、次節以下の解説を参照されたい。

また、規定の提出形式は、A2版パネル2枚と模型であったが、さらに本報告書用にA4版に対応する紙面に再構成してもらい、提出を義務づけた。

### (4) 講評

さて、このスタジオ課題では、最初に全ての課題を設計製図室に貼って展示し、第一次講評ではそれに対して各教官が採点を行い、その上位から順に約30件(全体の提出数は約100件)を取り上げて第二次講評を行う、という決まりになっている。また各スタジオから最低1名の推薦をすることが出来る。



図1-6 大学でのスタジオ課題展示の様子

第一次講評の結果、吉澤春奈、村田朋子、長谷川実希の三案が第二次講評へと進んだ。学生と10名ほどの教官とで行われる講評では、設計の意図、意匠、構造、現実性など、多岐にわたる視点からの批評がある。大学の設計課題は、単体あるいは数棟の群建築を対象とした新築設計であることが多く、今回のような歴史的都市を対象とすることは希である。しかも、そこに存在している町家群を直接の対象とするのだから、今までの課題に比べるとさらに多くの要素について検討が必要であったことは確かである。

一人当りの講評時間が僅かということもあり、議論が尽くされたとは言えないが、有効な指摘もいくつかあり、また、このようなケースに建築家が如何に関わるべきなのか、議論もあった。しかし、教官側からは余り積極的な提案、批評はなく、今後このようなテーマの課題一実は日本中で必要とされている一をどのように取り上げ、取り組むべきであるのか、冷静に考えてゆく必要を強く感じさせた。

講評の際、問題点が絞りきれなかった原因の一つは、歴史的都市、町家を全面的な対象とした課題が初めてであったということでもあるが、従来の建築設計の常識が通じない課題であったことにもよる。

過疎化した高田地区においては、町家を一棟の住宅と考えると、かなり広いのである。町の最盛期と比べると人口密度は半分以下である。また奥に長い敷地を全部使い切ろうとすると、かなり大きな住宅を作ることができる。すなわち、「過疎」という現象を前にすると、従来の設計方針が全く役に立たないのである。一般に、現在の日本の住宅は大都市に適應する形式として開発されてきた。従って、狭い敷地に狭い住宅を建て、内部をいかに機能的に造るか、ということが大きな目標であったのである。

今回の提案を見ると、既存の町家を住宅として改造する提案では、非常にゆったりとした建物が描かれている。また、奥に長い土地をたっぷり使った新築案であれば、夏と冬で場所を変えて住み分ける、というほどの贅沢が可能となる。すなわち、与条件を正當に活かすと、必然的に相當に贅沢な住宅が実現する。これは、従来の常識と全く正反対のことなのである。

#### (5) 上越市での市民フォーラム

以上のスタジオ設計課題において提案された10件の新築、修理・改造案を元にして、11月15日に、上越市高田の雁木通り美術館を会場として、「町家を活かしたまちづくりを考える市民フォーラム」が開催された。今回のスタジオ課題の報告と、建築家澤良雄氏が自ら手がけた古い住宅の修理・改造の実例報告が内容であった。澤氏は兵庫県伊丹市で建築設計事務所（アトリエ・サワ）を主催しながら、文化財そしてそれに準ずる古い建築を修復する先駆的な仕事を手がけている。

各設計案に対して、いくつかの意見が出されたが、特に福祉系の改造案に意見が集中した。聴衆に中年以上の方が多かったことも一因であるが、上越市高田地区の抱えている潜在的な課題が明らかにされたとも言える。また、個別住宅では、現代的な生活に適應できるような方向の改造案に対しても強い関心が寄せられた。（藤井恵介）



図1-7 市民フォーラムでの発表の様子  
(写真左より、鈴木、長谷川、澤氏、藤井)



図1-8 フォーラム会場の様子



図1-9 フォーラムでのパネル・模型展示の様子